

バンドン日本人学校におけるグローバル人材育成を意図した教育実践集

前在インドネシア日本国大使館付属バンドン日本人学校教諭
福島県福島市立福島第四中学校教諭 小林 香織

キーワード：英語教育、グローバル人材育成、現地・国際理解、在外教育施設教員としての心構え

赴任校の概要 2021年3月現在

学校名 在インドネシア日本国大使館付属バンドン日本人学校

学校名 Bandung Japanese School

URL <https://www.bjs.sch.id>

児童生徒数 幼稚園2名 小学部6名 中学部6名

1. はじめに

“バンドンでやってみたいことがあります！” “何でしょうか？”

“英語検定です！”

インドネシア語やスダ語も話し、外国語センスのあるバンドンの子どもたちだが、英語に触れる機会が少ない、日本のみならず世界で広く普及している英語検定がバンドンにないことを知り、赴任した年に校長先生に相談をしたときの会話である。

「すべては子どもたちのために」を教育スローガンとして学校を運営してくださった校長先生はじめ、先生方や保護者の方々のご理解のおかげで、バンドン日本人学校での英語教育を思うように実践させていただいた。

「心身ともに伸びる子どもたちを見守り、未来へつなぎたい」の思いで過ごした3年間の実践内容をここに記述する。

2. 実践内容ーバンドン日本人学校を準会場として英語検定が実施出来るようになるまで

(1) 英語検定の立ち上げ

①準会場登録申請 (2月)

- ・英検協会への準会場登録申請書(海外用)作成

学校設立年月日や学校法人認可、教育課程、後者敷地延べ面積などの報告のほか、学校沿革史について記載し申請

②登録申請承認後、児童生徒、保護者、バンドン日本人会連絡網へ英語検定実施の案内送信 (7月)

③面接委員申請・登録 (8月)

- ・オンラインによる面接委員トレーニングとテストを受講・受験
- ・ジャカルタ日本人学校の面接委員より推薦(面接委員番号と署名)をいただき、英検協会より認定。

④校内英検学習会の実施 (9月～10月) ⑤英検一次試験実施 (10月) ⑥英検二次試験実施 (11月)

日々の勤務の中で面接委員トレーニングを受ける時間確保が難しく、夏休みの一時帰国の時間を利用してトレーニングを行った。トレーニングは周囲に人がいる場所での受講は禁止のため、家族が寝静まったリビングで1人受講した。各級ごとに英語検定協会の厳しい規則に準じて公平公正に判断できるようトレーニングを受け、後にテストとなる。テストに不合格の場合面接委員申請からやり直しとなるため、一度で合格するためにトレーニングを繰り返した。これまで英検のなかったバンドンでは、準会場実施が叶っても、面接委員がいなければ二次面接を受けにジャカルタまで行くようになってしまう。バンドンからジャカルタまでの子どもたち

の移動時間と労力を考えた時に、「必ず合格しなければ」というプレッシャーもあった。また、中学部の生徒の進路希望先の高校によっては、出願条件として英語検定準2級以上、2級以上などが挙げられているため、子どもたちの進路選択の幅を広げるためにも重要であると考えた。

(2) “Experience is the best school” —総合学習（外国文化学習・グローバル学習）担当として—

H30 英会話・R1 外国文化学習と名称を変え、総合の時間と課外の時間をあわせ、全校生による国際理解・グローバル教育の時間を設けた。

学年によってはインドネシア学習の時間も取り、インドネシアの文化や言葉について知り、現地校交流の際に学習内容をもとに交流し、子どもたち一人ひとりが、日本文化発信の懸け橋となった。

外国文化学習では外部より講師3名を依頼し、英語教員とともに、言葉のやりとりのみならず、背景にある文化面にも目を向け、文化吸収とともに日本文化の発信も意識しながら、英語での授業を進めた。3学期には発表の時間を設け、2年連続で保護者を招待し英語による発表会を実施することができた。この発表会は個人の部とグループの部にわかれて実施した。

個人の部ではテーマにそって英語スピーチを作成し、「自分の言葉」で考えを発表するものとした。オリジナルであることが条件であり、本人しか話せないような内容を考え、思い出し、調べ、練り上げ、表現し、観客に伝えるなど、それぞれの過程を大切にしていた。具体物を提示したり、写真をはりつけてパワーポイントファイルを自分で作成し、どんな資料を用いてどのように伝えればよいのか、思いを巡らせながら発表できるようにした。

グループの部では子どもたちは学年をオープンにし、中学部の生徒を中心にオリジナルのスキットを作成し、インドネシアに伝わるお話や日本の昔話などを演じた。毎年自分たちで台本を作成、配役を決め、小道具を作成し、衣装を考える。照明やBGMはどうするのか？声の大きさやイントネーションは？様々な条件を自分たちでクリアしていくことで、連帯感のもとより、課題解決能力や、コミュニケーション能力の育成を目指している。中学生は下級生のセリフ作成や発音指導まで行いながら、自分の役割もこなしている。作り上げる過程を大切に、全て大人が与えるのではなく、自分たちで作り上げる大変さ、失敗から学ぶ経験、より良いものを作り上げる協働力、体験した者にしかわからない感動などが子どもたちの中に残れば幸いである。

(3) 外部英語講師との連携

上記の外国文化学習、英語、外国語の授業のほか、課外で英会話の時間を設けた。低学年は子どもたちの音声への慣れ親しみ、生涯にわたって学習していこうとする意欲喚起、高学年からはグローバル感覚を身につけ、自分の言葉で表現する、協働する力、コミュニケーション力の育成を目指して授業を展開した。3名の外部講師(インドネシア人)に複数学年をあわせた3グループに1人ずつ講師をおき、すべての授業を英語で進める。年度当初に、バンドンにある英会話学校のコーディネーターを通じて契約を交わし、年間計56時間ほど実施した。以下に、外交人講師導入のメリットとクラス編成のねらいについて述べる。

○外部講師導入のメリット

- ・外国語導入期の児童にとって正しい音や表現にふれる機会の設定。
- ・バンドン日本人学校での指導経験もあり、児童生徒の実態を把握し、指導に生かせる。
- ・将来的に英検の面接委員として依頼可能。

○クラス編成について

- ・世界的に行われている英語検定やTOEICなど資格試験の問題にチャレンジし、習熟度に応じて、次のステップへの意欲づけになるような支援を行う。
- ・学年を分け、様々な学年と関わることで、自分が話すばかりでなく、相手の話をしっかり聞くなど「話し合い=聞きあい」のマナーを身につける。

- ・インタビュー形式やグループでの発表など学年を固定せず、幅広い活動が可能となる。
- ・言語活動への意欲や良い刺激となるような機会とする。

外国語学習は長いスパンで子どもたちの学びにつながる。すぐに答えを求めて無理強いたり、教えこもうとして子どもたちの意欲をそぐことがないように講師との連携、こちらの意図をはじめにしっかり伝えておくことが必要不可欠となる。英語圏のESL等で行われているような、個に応じ、楽しい雰囲気を保ちながら、子どもたちが自分で運用する力をつけられるような言語活動、また世界に通じるルールとマナーも基本にして授業展開をしていただくようイメージをお伝えしたが、幸い熱心な先生方に恵まれ、子どもたちも抵抗なく英語学習に親しみ、コミュニケーションの楽しさを味わったと感じている。

令和2年度はコロナ感染症拡大のため、講師による対面授業が不可能であったが、2学期にICT実践事業協力校となったため、過去2年間の外国文化学習の意義をレッスンに組み込み、Zoom (Zoom Video Communications) によるオンライン授業を展開した。低学年は音声へ慣れ親しみ、視覚的にも楽しめるような教材の提供、高学年は状況を理解し自分で取り組む、わからないところはわからないと伝えるなど「自分の言葉」で発話させることをねらいとした。中学部は全員が英検2級程度または2級以上の力を備えており、自分の考えをさらに深めて伝える、ことを意図してレッスンを進めた。

(4) 現地理解研修

日本国内では教員の授業研究を行う学校が多いが、本校は「バンドンでしかできない研修」をねらいとし、教員が担当ごとにテーマを決め、他の教員へ向けての研修の時間を設けた。ここでは担当した研修①②について、また③④⑤については勤務内における現地理解の時間ということで概要を記述する。

①平成30年度「アンコタ乗車体験とLapang Olah Raga Sabuga (スポーツ施設)、ITB(バンドン工科大学: Bandung Technology Institute) 散策」

バンドン市内の公共交通機関の1つにAngkutan(アンコタ)と呼ばれる乗り合いのバスがある。10人も乗れば定員オーバーとなる小さなバスであるが、現地の方々は老若男女を問わず使用している。乗り方はいたってシンプルで、道路で手を挙げればどこでも停まってくれる。車体に向かう場所が書いてあるので自分の目的地に近いものが来たら乗る。運賃は1回3000ルピアから5000ルピア程度である。降りたいときは運転手に伝えればどこでも降りられる。途中、信号で楽器を持った青年が乗り込んできて音楽を披露しチップをもらって降りるなども見られ、運転手やほかのお客さんにも話しかけられるなど、インドネシアの人々とふれあえる乗り物である。教員はそれぞれの家庭で運転手を雇用し、自家用車での移動をしている。アンコタでの追突事故や盗難などのないように、安全に配慮し、学校ローカルスタッフにも同行してもらっての新鮮な文化体験となった。

②令和元年度「サンバル作りとジャムウ体験」

インドネシアならではの体験を先生方と共有することを考えた時に、食文化に目を向け、この国では欠かせない辛味調味料「サンバル」と、ショウガやウコンなど様々なハーブを使った健康に良い飲み物「ジャムウ」を作る研修を行った。

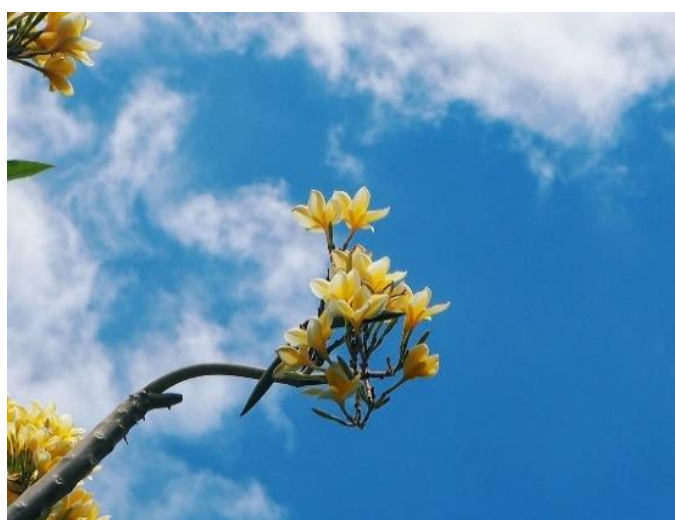
チョベとよばれる石のすり鉢とすりこぎを使い、ニンニク・エシャロット・唐辛子・トラシ(エビの発酵品) トマト・胡椒・塩などをすり潰していく。最近はブレンダーを使う人も多いようだが、石鉢ですり潰したものの味の違いは歴然であり、また家庭ごとにブレンドが違うようで、インドネシア人にとって欠かせない存在である。インドネシア人の学校スタッフを講師に迎え、実際に調理し、試食・試飲するなど楽しい時間となった。

③パティック作成 —教員とローカルスタッフのお揃いパティック—

H30 に現地採用の先生のアイデアで初めて教員とローカルスタッフでお揃いのバティックを作成することになった。その後3年目となる現在まで1年に1度、教員とスタッフお揃いのバティックを作成している。

当初はインドネシア人の幼稚園の教諭とローカルマーケットに生地を選びに行き、1人あたり1.5m×2mほどの計算で生地を購入していた。(100,000ルピア程)今年度はコロナ感染症予防のため幼稚園教諭の知り合いから生地見本を写真で送信してもらい、その中から選択した。

インドネシア人幼稚園教諭の知り合いのテーラーに、自分の作ってもらいたい見本となる服を届け、細かい希望を伝えた後完成を待つ。2週間ほどで同じ生地で作ったマスクとともに手元に届いた。(縫製は長袖が90,000ルピア、半袖が80,000ルピア程)。本校勤務のインドネシア人スタッフは幼稚園2名、事務2名、警備会社勤務ではあるがずっと本校の警備をしてくれている警備員が4名、用務員1名の計9名に、新規採用が2名で計11名分のバティックを日本人教諭からプレゼントした。日頃の感謝を込めて校長先生から渡していただいた。「明日のお祈りで着てもいいですか?」と喜ぶスタッフに我々日本人教諭も言葉のプレゼントをいただいたような気がした。



お揃いのバティックを着用してインドネシア人教諭とともに (右から2番目筆者)

インドネシアの青空とプルメリアの花

3. 在外教育施設の教員として—五感で体感する世界—

インドネシア語やタイ語でも「ヤシガラ椀の下のカエル」や「ヤシガラの中のカエル」という慣用句がある。日本語で言うところの「井の中の蛙」に近いのだと思うが、これが言わんとするのは「独りよがりの地方気質(プロヴィンシャルイズム)」である。ヤシガラ椀の下のカエルは、椀から這い出すことが叶わず、やがて頭上にある椀の天井が天空だと思い込むようになる、というものである。

日本人学校の教員は、日本全国から派遣される。「自分の県ではこうだ」とか、「前任校ではこうだ」に縛られすぎることなく、柔軟に物事に対応しながら、そして知恵を出し合いながら前に進むべきである。ヤシガラ椀の中にいる教員、自分の狭い感覚の中でしか物事を見つめられない教員は、世界を担うグローバル人材となる子どもたちを未来につなげることはできない。

在外教育施設では在外邦人や保護者の方々、現地スタッフの支えによって学校の教育活動が動いていく。住まわせていただいている国の文化や人々を尊重し、違いを楽しみながら、コミュニケーションを図っていく能力も大切となる。違って当然の海外生活、「日本と比べて…」違いを楽しむのか、違いを否定するだけなのか、後者に当てはまる人間はそもそも海外生活には向いているとは言えない。

一昨年度、バンドンへ赴任される新任の先生方へ向けて「バンドンユニバーサルデザイン」を作成した。バンドン日本人学校での勤務マニュアルの形式であるが、その行間には海外で働く心構えや、自分の少ない経験から感じ取ったこと、「すべては子どもたちのために」をちりばめたつもりである。

すべてに対して好奇心・探求心を持ち、クリティカルシンキングも取り入れながら、自らの耳と目を研ぎ澄まし、違いを楽しみながらより良いものを作り上げる創造性、課題に立ち向かう意欲、何よりも「すべては子どもたちのために」というバンドン日本人学校の教育スローガンを胸に、ダイバーシティを楽しみながら職務を全うしたいと心から感じた3年間である。

まだまだやりたいことは尽きない。教員になって以来発行している英語科通信のタイトル Bridge to the World は、世界の懸け橋となる人材に育ててほしいという願いから取っている。インドネシアの空のように澄んだ目でまっすぐに物事を見つめ、どんどんと伸びてゆく子どもたちの感性を教師が制限しないよう、私自身もヤングラ腕に覆われないよう学び続けたい。世界のどこにいても！